

# 「嫫」と「嫫」——人麻呂七夕歌の一用字と黄帝神話——

加藤 有子

はじめに

『万葉集』は漢字で表記されている。にも関わらず、漢字の持つ原義や用法との比較研究は以外と無視されがちであり、それらが試みられても『万葉集』以後の日本の用法を参考にのみであることが多い。その視点から万葉研究を見る場合、一部の研究を除けば「万葉代匠記」からさほど発展していないようにさえ見受けられる（以下「代匠記」と略す）。それほどに「代匠記」の偉大さに感じ入るわけでもあるが、近世よりも諸本研究が発展・容易になった現在、再び契沖の研究の根本の是非を問い、新説を提示する方法があってもよいように思われる。本稿では、偶然にそれを考えさせられる用字に出会った。私論を試みようと思う。

## 一、「ツマ」の用字

遥嫫等とほづまと 手枕易たまくらかへて 寐夜ねたるよは 鷄音莫動とりがねなき 明者雖明あけばあけぬと

右の初句「遥嫫等」の「嫫」字は、元暦校本・類聚古集(1)・

紀州家（神田）本(4)・寛永版本など非仙覚本系は皆「嫫」である。また、西本願寺本(6)・温故堂本(7)・大矢本の仙覚本系の三本に見られる文字は「嫫」に最も近い文字ではあるものの、やや省画・加画されており、「嫫」は書き誤りと解釈する注釈もある（本稿の万葉歌の引用は塙書房の校訂本による）。

右歌は『萬葉集』秋雜歌「七夕」所収の柿本人麻呂歌集の一首である。同じく人麻呂の七夕歌でも「ツマ」の表記は「嫫」（一九九八・二〇七五）・「妻」（一九九九）・「嫫」（二〇〇二・二〇〇四・二〇〇五・二〇〇六・二〇一〇・二〇一〇・二〇一〇）と多数みられるが、右歌の「嫫」字は西本願寺本全巻の中で

も孤例である。なお、「嬬」字他に関しては『萬葉集文字辨證』・小島憲之氏他の論に詳しいため、<sup>(9)</sup>ここでは詳説しない。

以下、「嫫」字に関する代表的な注釈を時代順に追って見ていこうと思う。まず、早くに「嫫」字に疑問を持ったのは「代匠記」である。当時、当該歌の「ツマ」の用字として通行していたのは寛永版本などの持つ「嫫」字であるが、契沖はその「嫫」字に疑問を投じている。

嫫ハ〈説文云。嫫母鄙醜也〉（玉篇云。嫫莫胡切。嫫母鄙醜也。亦作嫫）カ  
レハ今ノ義ニ非ス。玉篇云。嫫於京切。女之美称。若此字ヲ書誤  
レルヤ。<sup>(10)</sup>

「代匠記」（精撰本）は「嫫」字が「醜い」意味を持つため、意味的に当該歌にそぐわないとし、「女性の美称」の意である「嫫」字の書き誤りと解釈する。以下の寛永版本系を底本にする諸注も「嫫」字に疑問を投じ、それぞれの用字解釈を示す。「萬葉考」では「媛」字をあて、「今本嫫とあるのは媛を誤る事しるかれはあらたむ」、<sup>(11)</sup>『萬葉集略解』では「嫫は嫫の誤か」<sup>(12)</sup>などである。最も詳しいのは『萬葉集文字辨證』だろう。「代匠記」を受けたものか、「嫫之作嫫」と項目立てし、次のように述べる。

略解には嫫は嫫の誤かとあり、げに嫫にてはツマと訓べきよしなし、嫫は嫫と同字にて、説文に嫫、母都醜也とみえて、ミニクシなどよめる字也、玉篇に、嫫於京切。女之美称。とあり、この義を借てツマに用るたるなり、かくてこの

嫫字を嫫とかけるは、可洪一切経音義卷十三に嫫治上宣作京反、美也。とみえたる是也、又按に唐人英字を莫と作るこ  
とあり、（中略）これ古くより英の一体を莫ともかける  
によりて、此説はあるなり、かゝれば今も此俗体を用る  
たるものとすべし、<sup>(13)</sup>

などのように、まず、「嫫」字に疑問を投じ、「嫫」字の正当性を考証していく。右の中略部には『本草和名』・版本『新撰字鏡』・『和名類聚抄』・『以呂波字類抄』・『醫心方』・『類聚名義抄』・『本草綱目』・古鈔本『華嚴経音義』など多くの用例を引き、古くから「英」を「莫」と書いてきたことを根拠づけている。

これらの旧注に対し近注は、大多数が底本を西本願寺本とするため、ほぼ「嫫」字を前提に解釈するようになる。また、日本古典全書などは寛永版本を底本としながらも西本願寺本によって「嫫」字に解釈している。<sup>(14)</sup>以後、旧編の古典文学全集『萬葉集』<sup>(15)</sup>『萬葉集全注』<sup>(16)</sup>『萬葉集釋注』<sup>(17)</sup>などの注釈類と、塙書房・おうふう・角川書店の三つの本文校訂本は皆「嫫」字をとっている。しかし、それ以外の諸注には解釈の違いがいくつか見られ興味深い。以下、本文を「嫫」字以外にとる注釈を示す。まず、旧版の日本古典文学大系『萬葉集』（以下『旧大系』と略す）では、「嫫」字に解釈し、補注において次のように述べる。

底本、嫫に作る。元暦本・類聚古集・紀州本等、嫫に作

る。嫖は新撰字鏡に、姥嫖媽三字同、亡古反老女也、母也とあって、この歌の意に合わない。底本の文字を、嫖の誤かとみると、嫖は集韻に、虚干切、老嫗兒あり、これも歌の意に合わない。名義抄に、嫖という字があり、音卜、妹嬉桀妻と注している。これは、嫖の異体字で、広韻によると、嫖は卜と同音、博木切とあり、昌意妻也と注してある。昌意は中国古代の伝説中の人物の名であるから、嫖は妻の意と見られる。つまり、広韻の注も、名義抄の記載とともに、嫖が、妻の意をもつことを示す。おそらく、中国の文献を読んでいた人が、知識を弄して、遙嫖と書いて、遠妻の意を示したものであるうと思われる。よって本文を嫖と定める。<sup>(21)</sup>

と、詳細な検字のさまを見せる。また『萬葉集注釈』では江戸期までの旧注と『旧大系』の補注を引用し、「『旧大系』が」と言はれてゐるのに従ふべきだと思ふ。名義抄の『嫖』の下には『嫖正』ともあって、『嫖』と誤る可能性も一層認めやすいのである」と解釈する。<sup>(22)</sup>澤瀉氏は西本願寺本の「嫖」字が省画されている点までを解釈の根拠とされている。また、中西進氏の『万葉集全訳注原文付』も「原文、底本に『嫖』字、誤字説（古典大系）に従う<sup>(23)</sup>」とし、「嫖」字をとっている。

この「嫖」字の詳細に関しては次節で述べることとして、更に別字を取る注釈の例として新編古典文学全集をあげる（以下『新全集』と略す）。『新全集』では本文に「嫖」字を採用

し、頭注に、

ツマの原文、底本は「嫖」、元暦校本などは「嫖」に作る。「嫖」は老婆のさまを意味する字、「嫖」は醜女をさす字で、共に誤字の可能性が大きい。『玉台新詠』に美貌を表す字として「嫖」が用いられている。これが原文の文字であったと見なして改める。<sup>(24)</sup>

といった説明がある。この『新全集』の解釈にしても、中国古典の影響を考えた上の文字採用と言えり。また、「嫖」字を取るものとして『旧全集』が、頭注に「『ツマ』の原文『嫖』は『嫖』『嫖(嫖)』などの誤りか。『嫖』『嫖』はヨシ・ウルハシなどの意<sup>(25)</sup>」とし、伊藤氏の『萬葉集釋注』も、本文は「嫖」のまま「原文『嫖』は老嫗の貌を表す字。女の美しさという『嫖』『嫖』『嫖』などの誤りかともいう<sup>(26)</sup>」のように、新・旧の『全集』を受けた簡略な注を加える。更に『新大系』に至ると、本文に「嫖」字をあて、「初句原文の二字目は西本願寺本『嫖』、元暦校本他に『嫖』。いずれも意味が通じないので、誤字説が提出されている。今は、この前後に用例の多い『嫖』を誤写したものと考えておく<sup>(27)</sup>」とし、新たな見解を見せる。以上をまとめると、「嫖」字以外の文字に解釈するのは（略称にて記す）、

「嫖」……「代匠記」・「文字辨證」

「媛」……「萬葉考」

「嫖」……「略解」

「嫗」……『旧大系』・『注釈』・『全訳注』（中西）

「嫗」……『新全集』

「嫗」……『新大系』

ということになる。これらの諸注を総じて言うなら、非仙覚本系列の写本においては「嫗」字がほぼ主流を占めるのにかかわらず、「代匠記」が「嫗」字の持つ「醜」の要素が七夕歌にふさわしくない、「ツマ」は醜くあつてはならないという大前提をうち立てて以来、それを基盤に解釈をしており、西本願寺本を底本とする近年の注釈もその基本姿勢はくずしてはいない。確かに、七夕伝説を想像するならば、天帝の娘である織女を醜女（嫗）や老女（嫗）と考えるのは興ざめにしかない。しかし、例えば簡易的に『上代文学研究辞典』で「おおよそは七夕詩が天上界のロマンスとして華麗な宮廷風の世界を幻視するの<sup>(28)</sup>に対し、七夕歌はこの世の恋と重ねて現実に詠まれて<sup>(28)</sup>いる」というのが一般的解釈であるとするならば、現実に自分の側に寄り添う女は、恋というファクターを以ってしても、必ずしも美女ばかりではなく、多様性を見てもよいだろう。もちろん、単に現実的と言っても、和歌的修辞の要素も鑑むべきであり、単純に断ずることはできないが。

また、ここで再び本文にもどってみると、非仙覚本系はほぼ皆「嫗」を用いている。それに対し、現在一般に底本として用いられる西本願寺本の文字は、確かに「嫗」に近いが、

「嫗」より部分省画・加画された文字であり、字書類に同字を見出せない。それ以降の温故堂本・大矢本などの仙覚本系はより「嫗」に近い文字である。

稿者が見るに、紀州家本の「嫗」の行書体のくずし方は、異系列ながら西本願寺本の「嫗」の字形に比較的近似しているようにも見受けられる。あるいは仙覚本の字体も「嫗」の行書体に近い字形であったのではないかという可能性を想起させる。また、当該歌二〇二一の収められる巻十・秋雑歌の人麻呂の七夕歌に限定してみると、「嫗」と旁を同じくする「漢」が初句二文字目に配置される歌が一九九七・二〇〇〇・二〇一一・二〇一三・二〇一八・二〇二〇・二〇二九番と非常に多く、更に該当歌の「嫗」の右隣も「漢」であり（訓を除く）、仙覚の書写の段階で目移りや手クセで「嫗」と書くべきを「嫗」に書きかけた文字の名残が、西本願寺本などに見られる文字なのかもしれない。どちらにせよ、先入観なしに本文解釈に徹するならば「嫗」字の優位性を感じざるを得ない。また「嫗」「嫗」以外に想定が可能であるのは、古字書類等で「嫗」と字形が相互交代を認められる「嫗」字（「代匠記」以下）、書写体が西本願寺本の字体に近似する「嫗」字（『旧大系』以下）などが限度であり、「うるわしいツマであるべき」という前提から書写体の字形の異なる「媛」「嫗」「嫗」「嫗」などの文字を探し出して来ることには、本文解釈の側からは疑問を投げなければならないだろう。本

稿ではこのような前提の上、主に従来論究されて来なかった「嫫」字の解釈と、『旧大系』以下の指摘する「嫫」字に関して考えてみたいと思う（「嫫」に関しては『萬葉集文字辨證』に詳しい。そちらを参考にされたい）。

## 二、「嫫」と「嫫」

最初に、「嫫」字に関しては、『旧大系』に見られるように、『集韻』に「老媪兒」或いは「一曰、怒也」、「敬也、通作慕」とあるばかりで、他に用例を見いだせなかった事を先に述べしておく。

そもそも、「嫫」字が否定されるようになったのは、先に見てきたように「代匠記」が『説文』『玉篇』をあげ「カ、レハ今ノ義ニ非ス（略）嫫若此字ヲ書誤レルヤ」と、誤写説をとえたことにはじまる。確かに、契沖の指摘通り、『説文』『玉篇』には「醜」という解釈が最初に出されるが、<sup>(30)</sup>中国の文学作品において「嫫」字は、一義的に「醜」と用いられるわけではなく、ある一定の背景を背負って表現される文字である。七夕の伝承自体、中国を祖とするものである。契沖の指摘する辞書的的文字解釈以前に、「嫫」字の使われる文学的背景を受容した上での表記である可能性の方が高いだろう。その点においては『旧大系』が夙に、「おそらく、中国の文献を読んでいた人が、知識を弄して」<sup>(31)</sup>表記を選んだのだと解釈する方向性が正しいと思われる。

まず、後漢の『説文』によると、現行本で見える場合、「嫫、嫫母都醜也」とあり、<sup>(32)</sup>「代匠記」の「嫫母鄙醜也」と本文が微妙に異なる。また、『説文』の伝本のうち、「嫫、嫫母、古帝妃都醜也」<sup>(34)</sup>という本文もある。また『龍龕手鑑』にも「莫胡反、嫫母、黄帝妻、兒甚醜也」<sup>(35)</sup>とある。どちらにせよ、嫫（嫫の本字）は、「嫫母」が原義であり、「嫫母」を知らずして「醜」を考えるのは、文字を正しく解釈することにならない。ちなみに『大漢和辞典』の「嫫」字にも「しこめ、昔の醜女の名。嫫母。もと嫫に作る」とあり、<sup>(36)</sup>やはり「嫫」という文字そのものに、「嫫母」の意味があることをあげている。また、中国の文献を散見するに、「嫫」字を用いる例は多いとは言えないが、そのほとんどの用例は（一字を以ってしても）「嫫母」そのものを指すのが一般的と行ってよい。

この「嫫母」とは誰のことだろうか。「嫫母」とは、先の『説文』の一本に「古帝妃」、『龍龕手鑑』に「黄帝妻」とあるように、伝説の聖帝・黄帝の後の名である。醜女ながらも、賢徳を以て知られる。中国の神話・民間信仰では、黄帝は非常に活躍するが、その后の中では最も著名な存在と言える。「嫫母」は、正史である『史記』黄帝本紀の本文の系譜部分には直接その名は見えず、「嫫祖為黄帝正妃」の注に、

索隱案、黄帝立四妃、象后妃四星。皇甫謐云「元妃西陵氏女、曰累祖、生昌意」。次妃方雷氏女、曰女節、生青陽。次妃彤魚氏女、生夷鼓、一名蒼林。次妃嫫母、班

在三人之下。」案、國語夷鼓、蒼林是二人。又案、漢書古今人表彤魚氏生夷鼓、**媼母**生蒼林、不得如謚所說。

太史公乃據大戴禮、以累祖生**昌意**及玄囂、玄囂即青陽也。君甫謚以青陽為少昊、乃方雷氏所生、是其所見異也。

正義華陽國志及十三州志云「蜀之先肇於人皇之際。黃帝為子**昌意**娶蜀山氏、後子孫因封焉。帝顓頊高陽氏、黃帝之孫、**昌意**之子、母曰**昌僕**、亦謂之女樞」<sup>37)</sup>

【訓読】索隱案に、黃帝四妃を立つ、后妃は四星を象る。皇甫謚云ふ。「元妃は西陵氏女、累祖と曰ふ。**昌意**を生む。次妃は方雷氏の女、女節と曰ふ。青陽を生む。次妃は彤魚氏の女、夷鼓を生む、一名蒼林。次妃は**媼母**、班は三人の下に在り。」案に、『國語』は夷鼓、蒼林是れ二人。又案に、『漢書』古今人表に彤魚氏は夷鼓を生み、**媼母**は蒼林を生む。謚の所説の如きを得ざる。太史公乃ち『大戴禮』に拠る。累祖は**昌意**及び玄囂を生み、玄囂は即ち青陽なり。皇甫謚青陽を以て少昊と為し、乃ち方雷氏生む所は、是れ其の異を見る所なり。『正義』『華陽國志』及『十三州志』に云ふ「蜀の先肇人皇の際。黃帝子たる**昌意**蜀山氏を娶り、後に子孫は封に因る。帝顓頊高陽氏、黃帝の孫、**昌意**の子、母は**昌僕**と曰ふ。亦た女樞と謂ふ。」

などとある。右の索隱注(唐・司馬貞)は黃帝は四妃を立て、四つの星を象ると記している。だが「媼母」の名は見えないものの、系譜的な場面に登場するのみで、後述する「媼母」の特質に関しては触れられていない。黃帝神話自体、戦国末以降に五行思想を背景に成長していったとされ、<sup>38)</sup>「媼母」も以後の諸書において黃帝の四妃の中、最も著名となっていく

ことから、黃帝神話の成長と共に「媼母」神話も成長していったと思われる。

また、右の文にみられる「帝顓頊高陽氏、黃帝之孫、**昌意**之子、母曰**昌僕**」の「昌僕」は、前節で示した『旧大系』が「媼」を本文にとり、根拠に「昌意は中国古代の伝説中の人物の名であるか、媼は妻の意と見られる」とする「媼」のことである。ただし、参考までに、「昌僕」のことを『廣韻』のように「昌媼」と記す本文は珍しい。中国では女性の名の文字の偏を入れ替え、女偏で記す例がいくつか見られ、<sup>39)</sup>これもその一つと思われるが、一般的には『史記』以下「昌僕」である。いずれにせよ、『萬葉集』の古写本が持つ「媼」字も、『名義抄』『廣韻』を根拠に『旧大系』以下の三注がとる「媼」字にしても、黃帝神話の周辺に存在する女性の名であるというのは興味深い。だが、「昌僕」に関しては、右の『史記』の如く、黃帝の系譜を語る上で登場するのみで、その性質や個別の神話は見出し難い。黃帝に関して最も詳しい記録と言われる唐の王韓の「軒轅本紀」(『雲笈七籤』所収)にも、「媼母」に関しては「訓宮人、而有淑德、奏『六徳之頌』」とあり、後述の記録も掲載されるのに対し、**昌僕**に関しては「**昌意**娶蜀山氏女」として系譜があるのみである。<sup>40)</sup>黃帝神話の系譜上は「媼母」より重要な人物と言えるが、後代の文献に与える影響が少ない存在である。それに対し、「媼母」は系譜上よりも、神話(説話)的広がりを見せる。例え

ば、六朝に成立した『瑠玉集』「醜人」には、

媼母、黄帝時極醜女也。鉗額、頰頰、形麤、色黒。今之  
媼頭是其遺像。而但有德黄帝納使訓後宮。出帝王世家。<sup>(41)</sup>

【訓読】媼母黄帝の時の醜女也。鉗の額、戚は頰頰にして、形  
は麤く、色黒し。今の媼頭是れ其の遺像なり。而して但だ徳有  
り黄帝納めて後宮を訓ぜしむ。帝王世家に出づ。

とある。これには、確かに媼母は醜女として存在するが、重  
要な点は黄帝がその「醜」を問題にせず、「徳があつたので、  
黄帝が後宮に入れて教育にあたらせた」という、醜いながら  
も寵愛された女性として認識されているという点である（日  
本への『瑠玉集』の伝来が早いことは既に知られている）。

また、右の媼頭（大儼でかぶる鬼面）には、「大儼」の起源  
説話としての「媼母」の存在を知ることができる。やや時代  
が下るが唐の「軒轅本紀」にも、

帝周游行時、元妃嫫祖死于道、帝祭之以爲祖神。令次妃  
媼母監護于道、以時祭之、因以媼母爲方相氏。<sup>(42)</sup>

【訓読】帝周遊行の時、元妃嫫祖道に死す。帝之を祭り祖神と  
す。次妃媼母をして道に監護せしめ、時に之を祭る。因りて媼  
母を以て方相氏とす。

とある。古代中国では葬儀の際も方相氏が先導したという。  
そもそも黄帝は諸物の起源を語られる際に名を見る事が多い  
が、日本には大儼が伝わった際、共に方相氏の起源譚（媼母  
の名）まで伝わっていたかは不明である。ちなみに日本での

「大儼」の記録として最も早いものは慶雲三（七〇六）年十  
二月（『続日本紀』）である。<sup>(43)</sup>「媼」字の表記が人麻呂による  
ものか、それ以降のものかは不明であるが、いずれにせよ、  
右に類似する「媼母」神話（説話）は種々の形で伝来してい  
たことは確かだろう。

また、媼母は文学作品では「醜」の代表として、美女の代  
表「西施」と対で用いられる例が非常に多い。この対は、次  
にあげる『文選』の用法に代表されよう。奈良朝における李  
善注『文選』の受容・書写も既に通説である。

①「吳季重答東阿王書」

〔文選〕書中・『芸文類聚』言志「答陳思王曹植書」  
若追前宴、謂之未究、傾海為酒、并山為肴、伐竹雲夢、  
斬梓泗濱、然後極雅意、盡歡情、信公子之壯觀、非鄙人  
之所庶幾也。若質之志、實在所天。思投印釋黻、朝夕侍  
坐、鑽仲父之遺訓、覽老氏之要言、對清醑而不酌、抑嘉  
肴而不享、使西施出帷、媼母侍側、斯盛徳之所蹈、明  
哲之所保也。

【訓読】若し前宴を追ふに、之を未だ究めずと謂ひ、海を傾け  
て酒と為し、山を并せて肴と為し、竹を雲夢に伐り、梓を泗濱  
に斬り、然る後に雅意を極め、歡情を尽くさんとならば、信に  
公子の壯觀にして、鄙人の庶幾ふ所に非らざるなり。質の志の  
若きは、実に所天に在り。印を投じ黻を釈て、朝夕侍坐し、  
仲父の遺訓を鑽し、老氏の要言を覽、清醑に對して酌まず、嘉  
肴を抑へて享せず、西施をして帷を出で、媼母をして側に侍

せしめんことを思ふ。斯れ盛徳の蹈む所、明哲の保つ所なり。

②「王子淵四子講徳論并序」 (『文選』論一)

文學曰、何為其然也。昔甯戚商歌以干齊桓、越石負芻而寤晏嬰、非有積素累舊之歡、皆塗觀卒遇、而以為親者也。故毛嬙西施、善毀者不能蔽其好。嬖媢倭媢、善譽者不能掩其醜。苟有至道、何必紹介。

【訓読】 文學曰く、何為ぞ其れ然らん。昔甯戚は商歌して以て齊桓に干め、越石は芻を負ひて晏嬰を寤す。積素累旧の歡有るに非ず。皆塗に觀卒かに遇ひ、以て親に為せる者なり。故に毛嬙西施、善く毀る者も其の好きを蔽ふ能はず。嬖媢倭媢は、善く譽むる者も其の醜を掩ふ能はず。苟くも至道有らば、何ぞ必ずしも紹介せん。

①は、美女との対比として「媢母」があげられるが、賢徳のある存在であるからこそ、側に侍らせることが「盛徳の蹈む所、明哲の保つ所」につながるのである。しかし、②に見られるように、大多数の詩文では「西施」などの「美」と「媢母」の「醜」を対にし、その賢徳の意味を含まないことが多い。少なくい。とは言え、「媢母」を用いた文章は非常に多い。少なくとも『文選』『琇玉集』などを受容していた奈良朝の知識人にとっても「黄帝の後・媢母」は、捉え方の別はあったとしても、非常に馴染みが深い存在のはずである。人麻呂歌の表記者が誰であったとしても、奈良朝やそれ以降の官人・文化人が目にしない名(文字)ではないだろう。

最後に、もう一つ忘れてはならないのが、同じく『旧大系』

が指摘しながら言及しない『名義抄』の「媢、妹嬉、桀の妻」の記述である。これに關しても簡単に触れておこう。觀智院本『名義抄』が「妹嬉」としているのは、正しくは「妹嬉」のことで(45)「妹」と「媢」は別字)、夏の桀王の後で有施氏の女、妹喜・末喜とも書く。確かに美しい女性であったというが、日夜桀王と宴飲し、桀王の政道が昏乱し、夏から商(殷)に政朝が変わる元凶ともなった女性とされる。「妹嬉」に関する記述は諸書に見られるが、最も詳しい記述を持つ、前漢・劉向撰の『列女伝』孽嬖伝を引用してみる。

妹喜者、夏桀之妃也。美于色、薄于徳、亂孽無道、女子行丈夫心、佩劍帶冠。桀既棄禮義、淫于婦人、求美女、積之於後宮。收倡優侏儒、狎徒能為奇偉戲者、聚之于旁、造爛漫之樂、日夜與末喜及宮女飲酒、無有休時。置末喜于膝上、聽用其言、昏亂失道。驕奢自恣。為酒池、可以運舟。一鼓而牛飲者三千人。騎其頭、而飲之于酒池。醉而溺死者、末喜笑之、以為樂。龍逢進諫曰、「君無道、必亡矣。」桀曰、「日有亡乎。日亡而我亡。」不聽。以為妖言而殺之。造瓊室瑤臺、以臨雲雨、殫財盡幣、意尚不饜。召湯囚之於夏臺。已而釋之。諸侯大叛。於是湯受命而伐之、戰于鳴條。桀師不戰、湯逐放桀。與末喜嬖妾、同舟流于海、死于南巢之山。詩曰(省略)。頌曰(省略)。

【訓読】 妹喜とは、夏桀の妃なり、色は美にして徳は薄く、乱孽無道、女子にして丈夫の心を行ひ、劍を佩び冠を帯ぶ。桀



既に礼儀を棄てて、婦人に淫し美女を求めて、これを後宮に積む。倡優侏儒、狎徒の能く奇偉の戯をなす者を収めて、これを旁に聚め、爛漫の樂を造りて、日夜末喜及び宮女と酒を飲み、休む時有る無し。末喜を膝上に置きて、其の言を聴用し、昏乱道を失ふ。驕奢自ら恣にし、酒池を為るに、以て舟を運ぶべし。一鼓にして牛飲する者三千人。其頭を騎ぎて、これを酒池に飲ましむ。酔ひて溺死する者あれば、末喜これを笑ひ、以て樂しみと為す。龍逢進みて諫めて曰く、「君道無くば、必ず亡びん。」と。桀曰く、「日亡ぶるあるか。日亡びなば我亡びん。」と。聴かず。以て妖言となしてこれを殺す。瓊室瑤台を造りて、以て雲雨に臨み、財を殫し幣を尽すも、意なほ暨かず。湯を召してこれを夏台に囚ふ。已にしてこれを釈す。諸侯大いに叛く。ここにおいて湯命を受けてこれを伐ち、鳴条に戦ふ。桀の師戦はず、湯遂に桀を放つ。末喜・嬖妾と舟を同じうして海に流れ、南巢の山に死す。死曰(略) 頌曰(略)。

とある。右の他「妹嬉」の名は「桀蔽於末喜斯觀」(『荀子』解蔽)・「桀之放也以末喜」(『史記』外戚世家)・「亡也以末喜」(『新序』雜事)などのように、桀王の「蔽害」「放蕩」「亡」の原因、また王朝交代を導いた女として慣用的に用いられてきたと言つてよい。先の「嫫母」の醜いながら賢く徳があり、夫・黄帝(軒轅)の後宮を訓じた(「至如嫫訓軒宮」)などの伝説を持つのと対照的に、「妹嬉」は美しいながら徳が薄く、夫・桀王の政治混乱の理由とされる悪女である。この点は小島氏以下が同じく人麻呂歌の「嫫」の用字の元を、中国の伝説の悪女「嫫(驪)姫」とするのを誤りとするのと論を同じ

くしたい。

本節では、「ツマ」を「嫫」又「嫫」と解釈した場合、文字の背景に中国神話が存在することを見てきた。「嫫」は黄帝の後で、醜いながら賢徳の妻。「嫫」の『名義抄』の解釈では、夏の桀王の妃で、薄徳で混乱の元凶の妻。「嫫」の『廣韻』などの解釈では黄帝の息子・昌意の妻で昌僕のこと。また、「嫫」字は諸注が先に「老嫫貌」と指摘する以上は、用例も些少で、稿者には意味の広がりが見出せなかった。これらから単純に文字の意味から「ツマ」を考えるなら、「老嫫」や、同じツマであっても知名度の低い「昌僕」、悪女の代表「妹嬉」よりも、「醜」ながら、黄帝に寵愛されたツマ「嫫母」が、七夕歌で地上の愛を投影するにふさわしい「ツマ」の意味のように受け取られる。

また、先に引用した『史記』の索隱注には「黄帝立四妃、象后妃四星」とあり、詳細は不明ながら、星と無関係では無い。次節であげるが、黄帝も同じく星と関連を持つ。ここで、万葉の表記者がどこまでこれらの神話を受容していたかを簡単に見てみよう。

### 三、上代における黄帝神話の認識

前節でのべてきた「嫫母」「昌僕」の認識は中国・日本において、当初はおそらく単独の受容ではなく、黄帝の系譜やその周辺で端役的に登場する名であったろう。だが、「嫫母」

の名は時代を下るにつれて、「美」「醜」の対や政治との関わりから、故事のように単独に用いられていく。先にあげた『文選』などの例もその一例である。しかし、上代文学の表面には本稿で論じる以外に「嫫母」「昌僕」が現れるのを、稿者は浅学にして見出すことができなかった。だが、伝説の聖帝・黄帝をめぐる神話、一般によぶ「黄帝神話」が奈良朝の知識層に受容されていた形跡は明確に見ることができ、本節では「嫫母」「昌僕」の受容を知る足がかりとして、黄帝神話について簡単に触れてみたいと思う。

そもそも黄帝とは、三皇の一（人）で、戦国末頃から成立した名と考えられている。伝説上文字を発明した蒼頡を史官として、初めて六書を制し、律呂を定め、五音を和し、暦や算数、車や薬などを作ったとされる神話的人物である。また、神仙家の始祖として老子と並んで黄老と呼ばれ、房中術（性交に関する禁忌や術）の創始者とも見なされている。<sup>52)</sup>

黄帝神話の受容は『経国集』所収の奈良朝作の対策文に見出すことができる。まず、それと確認できる対策の該当箇所を抜き出して一覧してみる。A・Bは葛井諸會の作、C大神蟲麻呂、D下毛野蟲麻呂の作である。<sup>53)</sup>

【A】對、臣下、人生天地、以學爲先、所以

〔木德之后、書龜圖以學、然則〕〔學是脩德之端、

星精之帝、模鳥跡以習、〕〔習亦立身之要、

【訓誥】對ふ。臣聞く、「人は天地に生まれ、学を以ちて先となす」と。所以に、木德の後、龜図を画きて学び、星精の帝、鳥跡を模ねて習う。然則ち、学は脩德の端にして、習も亦た立身の要なり。

【B】對、竊以

〔誅惡之義、先聖垂典、所以〕〔無爲軒帝、動三戰之跡、

戮逆之旨、後哲宣軌、〕〔有道周王、示二叔之放、

【訓誥】對ふ。竊に以みれば、誅惡の義は、先聖の垂典、戮逆の旨は、後哲の宣軌なり。所以に無爲軒帝、三戰の跡を動かし、有道周王、二叔の放を示したまふ。

【C】當今

〔握袞御俗、〕〔風清執象之君、〕〔設禹麾而侍士、

履翼司辰、〕〔聲軼繞樞之后、〕〔坐堯衢以求賢、

【訓誥】當今、袞を握り俗を御め、翼を履み辰を司りたまふ。風は執象の君よりも清く、声は繞樞の後よりも軼ぐ、禹麾を設けて士を待ち、堯衢に坐して賢を求む。鼓腹擊壤の民、紫陌に抃舞し、負鼎釣璜の佐、丹墀に接武す。

【D】對、竊以

〔眇觀列辟、〕〔繞電履翼之皇、

逖聽風聲、〕〔洞八連三之帝、

雖歷代千古、而源仍畫一。

【訓読】 対ふ。竊かに以みれば、眇に列辟を覩るに、繞電履翼の皇あり、遯く風声を聴くに、洞八連三の帝あり代を歴ること千古なりと雖も、源は仍し画一なり。

右の[A]、[B]の対策文の傍線部が、黄帝神話の受容の上に書かれたと思われる部分である。[A]・[B]・[D]は対策文の「問」や「対（答え）」の冒頭部周辺で、「そもそも○×（対策の内容）の始まりは〜」などというように、天地や文化の始まりを語る部分に、古代の聖帝を下敷きに語られる事が多く、そのパターンの一例と言える。それらには黄帝以外の聖帝・聖人も数多く用いられる。例えば[A]では木徳の後、つまり伏羲、[B]は周の成王、[C]は禹・堯・舜・周の後稷・殷の伊尹・周の太公望を、[D]は周の後稷などの故事をあげている。右にあげた以外の対策文にも同様である。これら伝説の聖帝・聖人の一人として黄帝も登場するのであり、特別な扱いを以って記されるわけではない。

それでは、右の[A]、[D]の対策文に黄帝がどのように表現されているか、簡単に見てみよう。[A]の作者・葛井諸會は天平七年時、大史正六位下の官人。対策文はそれ以前の作で、小島氏によると和銅四（七一）年の作とされ、人麻呂没直後の頃の作品と言える。<sup>54</sup> 本稿では同時代の作品として参考に扱いたい（[C]・[D]もほぼ同時代）。傍線部の「星精の帝」以下は、星の精である黄帝が、臣の蒼頡が鳥の足跡の形をまねて創った文字を習ったというものである。<sup>55</sup> [C]の「繞樞之后」、

[D]の「繞電（略）之皇」も同じ故事から生まれた表現である。まず、黄帝と星との関連から『宋書』符瑞志を見てみよう。

黄帝軒轅氏母曰附寶、見大電光繞北斗樞星照郊野、感而孕、二十五月生黄帝於壽丘。<sup>56</sup>

【訓読】 黄帝軒轅氏、母は附宝と曰ふ。大電光の北斗樞星を繞り郊野を照らすを見、感じて孕む。二十五月にして寿丘に黄帝を生む。

右が、黄帝の母が大電光が北斗星の第一星である樞星を繞るのを見て感応し、黄帝有熊氏を生んだという異常出生譚である。これのみでは[A]「星精の帝」の出典と呼ぶのをためらわれるが、以下に続く「鳥跡を模ねて」という蒼頡と文字の起源譚は諸書に見られ、知らない人はない。『初学記』所引「帝王世紀」には「黄帝垂衣裳、蒼頡造文字。然後書契始作其始也」（黄帝衣裳を垂れ、蒼頡文字を造る。然る後、書契始めて作る。其の始なり）、また同「衛恒四體書勢」には「黄帝之史沮誦蒼頡眡彼鳥跡始作書勢紀綱萬事垂立法立制」（黄帝の史誦を沮め、蒼頡彼鳥の跡を眡て書勢・紀綱の萬事を始めて作る。法を垂れ制を立つ）などがそれぞれである。<sup>56</sup> ここでの「星精の帝」は黄帝以外はないだろう。この黄帝の異常出生譚は著名であったらしく、梁・沈約の「光宅寺刹下銘」にも「壽丘鬻鬻、電繞樞星」などと用いられるように、<sup>57</sup> 六朝期頃には故事のようになって知識層に定着していたようである。奈良朝の対策文に見える様相もそれらの流れの上にあると言

えよう。

右の[A]・[B]は、奈良朝作の対策文のうち、黄帝の名が見えるものをあげたものだが、[A]・[B]は葛井諸會の連作のため、同じ黄帝を下敷きに用いても、[B]は表現を変えたものと思われる（もとより「間」自体も異なる）。[B]の「無爲軒帝、動三戰之跡」は『史記』五帝本紀の「以與炎帝、戰於阪泉之野、三戰、然後得其志」などに見える黄帝と炎帝の戦いを元にした表現である。<sup>58</sup>それ以外の[A]・[C]・[D]の三例は全て黄帝の、右にあげた北斗七星をめぐる異常出生譚を下敷きにしたものである。黄帝は、養蚕の起源、衣裳・冠冕・舟・車・武器・甌を始めとして、無数の事物の起源に関わる聖帝とされているが、奈良朝の官人達の興味の方向性は何よりもその星をめぐる異常出生譚であったことが伺われる。（加えるなら、[A]「模鳥跡以習」の蒼頡の故事も、他に紀真象の対策に「類物写迹、蒼頡廣之于後」などと注目されている）。

本来ならば、黄帝神話と呼ばれるものは、このような断片的な説明で論じられる問題ではない。しかし本節では紙幅の都合上、論旨に沿うものだけをあげてみた。今後の比較研究が俟たれる部分でもある。いずれにせよ、それらの無数の黄帝神話の中で、対策文作者である奈良朝官人達が最も興味を持った異常出生譚、「星精の帝」のイメージが、七夕歌でその妃「嫫母」の名（表記）を用いさせる端緒となったのではないかと稿者には思われるのである。また、『萬葉集』の表

記は、作歌者によるものではないという考え方もあり、表記によって歌内容を越えた意味を浮かび上がらせている例も多い。そういう見地で穿った考え方をすれば、星精の帝・黄帝の最愛の妃「嫫母」を背後に抱え、「醜くとも最愛のツマ」という表記上の含意を持たせた例と言えなくもないだろう。

おわりに

本稿では、人麻呂の七夕歌の「嫫」の表記をめぐって論じてきた。第一節では諸注の見解をあげた上、稿者による本文解釈上「嫫」に優位性を見ることを論じ、第二節では「代匠記」以下が否定する「嫫」字が、通常中国の伝説の聖帝・黄帝の妃「嫫母」を指すことを示し、その用例を見た。奈良朝に伝来が確認できる『文選』『瑠玉集』などにもその名は見られ、当時の知識人が受容していた可能性が非常に高かったことを指摘した。第三節ではその補足として奈良朝における黄帝神話の受容の一端を見てみた。それによると、『経国集』所収の対策文から見た奈良朝における黄帝の印象は、第一にその異常出生譚であり、星を中心に表現されている。『萬葉集』の表記者にも、黄帝神話は当然知識の上にあったと思われる、醜いながら黄帝に寵愛されたといわれる「嫫母」の存在も知識の中にあっただろう。葛井諸會の表現を借りるなら「星精の帝」の最愛のツマとでも言うべきか。表記者がそこまでの意味をもって記したのか、或いは単に遊びの要素を含んで

用いたのかは不明であるが、稿者には七夕歌二〇二一番歌のツマの用字は「嫫」が最もふさわしいように思われる。

※ 本稿は『萬葉集文字辨證』の演習における問題点を基とする。なお、第三節における『経国集』の問題等は、古代文学学会員の有志による「日本漢文を読む会」にて啓発された部分が大きい。それぞれの関係者各位への謝意をここに記す。

### 注

※ 本稿の引用は基本的に原文を旧字、訓読は新字に改め、固有名詞も旧字を用いた。

- (1) 佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著『萬葉集』（塙書房）
- (2) 『元暦校本萬葉集』（朝日新聞社）
- (3) 『類聚古集』（臨川書店）
- (4) 『紀州家本萬葉集』（後藤安報恩會）
- (5) 『校本萬葉集』（岩波書店）
- (6) 『西本願寺本萬葉集』（おうふう）
- (7) 注(4)に同じ
- (8) 注(4)に同じ
- (9) 木村正辞『萬葉集文字辨證』（勉誠社）・小島憲之「萬葉用字考証事例(三)―原本系『玉篇』との関聯に於て―」『萬葉集研究』第四集（塙書房）・稲岡耕二「『嫫』の誕生とその周辺―人麻呂の創意―」和漢比較文学叢書第九卷『萬葉集と

漢文学』（汲古書院）など。

- (10) 『萬葉代匠記』『契沖全集』（岩波書店）
- (11) 『萬葉考』『賀茂真淵全集』（吉川弘文館）
- (12) 日本古典全集『萬葉集略解』（日本古典全集刊行会）
- (13) 木村正辞『萬葉集文字辨證』（勉誠社）
- (14) 日本古典全集『萬葉集』（朝日新聞社）
- (15) 日本古典文学全集『萬葉集』（小学館）
- (16) 阿蘇瑞枝『萬葉集全注』（有斐堂）
- (17) 伊藤博『萬葉集釋注』（集英社）
- (18) 佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著『萬葉集』（塙書房）
- (19) 鶴久・森山隆編『萬葉集』（桜楓社）
- (20) 中西進『校訂萬葉集』（角川書店）
- (21) 日本古典文学大系『萬葉集』（岩波書店）
- (22) 澤瀉久孝『萬葉集注釋』（中央公論社）
- (23) 中西進『萬葉集全訳注原文付』（講談社）
- (24) 新編日本古典文学全集『萬葉集』（小学館）※なお、本書の指摘する『玉台新詠』は「車中見美人」詩で「語笑嬌能嫫、行步絶透逸」とあり、「嫫」の注に美人の顔色が姝好（好ましく美しい）様とある。「玉臺新詠箋注』『玉臺新詠索引』山本書店）
- (25) 注(15)に同じ
- (26) 注(17)に同じ
- (27) 新日本古典文学大系『萬葉集』（岩波書店）
- (28) 小野寛・櫻井満『上代文学研究事典』（おうふう）
- (29) 『集韻』（上海古籍出版社）
- (30) 注(10)に同じ
- (31) 注(21)に同じ

- (32) 『説文解字』(天津市古籍書店)
- (33) 注(10)に同じ『広韻』には「鄙醜也」とある。
- (34) 諸橋轍次著『大漢和辞典』(大修館書店)所引『説文』による。繫伝系の本文に同文が見られるため、それらからの採用か。
- (35) 『龍龕手鑑』(日本古典全集刊行会)
- (36) 注(34)に同じ
- (37) 吉田賢抗・新釈漢文大系『史記』(明治書院)
- (38) 近藤春雄著『中国学芸大事典』(大修館書店)を参照。なお、司馬貞は唐代の人とあるが、生没年未詳。
- (39) 例えば政治に関わる悪女で名高い「驪姫」の「驪」を「麗」「麗」と書くこともある。注(9)の論文に詳しい。
- (40) 「軒轅本紀」「雲笈七籤」(華夏出版社)※簡体字は繁体字に改めた。
- (41) 『瑠玉集』(古典保存会)同書・真福寺本は天平十九(七五六)年に書写の記述があり、その伝来が早かったという事は既に指摘されている。(『中国学芸大事典』)
- (42) 前出(40)に同じ
- (43) 新日本古典文学大系『続日本紀』(岩波書店)※ここにはその内容の詳細は見えない。
- (44) 小尾郊一・全釈漢文大系『文選』(集英社)
- (45) 『類聚名義抄』(風間書房)
- (46) 荒城孝臣・中国古典新書『列女伝』(明德出版社)
- (47) 藤井専英・新釈漢文大系『荀子』(明治書院)
- (48) 注(37)に同じ
- (49) 「新序」『漢魏叢書』(吉林大学出版社)
- (50) 列女列伝『魏書』(中華書局)
- (51) 注(9)・注(39)に同じ。「麗」の表記も仮に「驪姫」を背後に抱えて考えるなら意味的には『名義抄』の「嫫」(末喜)と「嫫」は対等になる。(『龍龕手鑑』にも「麗、音離、麗姫、晉公之妻」、とある)その場合、作歌者と表記者は別と考える。「麗姫」「末喜」はともに『列女伝』にその伝が詳しい。しかし本稿では本文の優位性から、「嫫」をとる。
- (52) 袁珂著『中国神話伝説辞典』(大修館書店)
- (53) 『経国集』の底本は基本的に群書類従本に従い、小島憲之「國風暗黒時代のさきぶれ」『國風暗黒時代の文學』(塙書房)より書式と訓読・解釈を参考にした。
- (54) 小島憲之「國風暗黒時代のさきぶれ」『國風暗黒時代の文學』(塙書房)
- (55) 符瑞志『宋書』(中華書局)
- (56) 「初學記」『景印文淵閣四庫全書』第八九〇冊(台湾商務印書館)
- (57) 『全上古三代秦漢三國六朝文』(中文出版社)
- (58) 注(37)に同じ
- (59) 注(40)(52)による